ジョルジュ・バルビエのファッション・プレートにみるアール・デコ・ファッションの諸相

井上 裕之
神戸松蔭女子学院大学人間科学部
Author's E-mail Address: h-inoue@shoin.ac.jp

Various Aspects of Art Deco Fashion in Georges Barbier's Fashion Plates

INOUE Hiroyuki
Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

ジョルジュ・バルビエはアール・デコを代表するイラストレーターである。
アール・デコ期に当たる 1920 年代のファッションは革新や変革という言葉を持って説明される。コルセットからの解放が行われ、身体のラインを強調しないストレートなシルエットと極力装飾を排したデザインが特徴とされる。それらはギャルソンヌ・ルックと呼ばれ、活動的で自立した女性のファッションとして紹介される。一方、ジョルジュ・バルビエのファッション・プレートに描かれたファッションは、多分に装飾的であり、トレーンなどの非活動的な要素が目立ち、前時代的に映る。

本稿では、バルビエが描いた 1920 年代のファッション・プレートを基に、決して一面的ではなかったアール･デコ･ファッションの諸相について考察した。バルビエが「*Gazette du Bon Ton*」誌で多く描いたメゾンである、ハウス・オヴ・ウォルト、ジャンヌ・ランヴァン等のデザイナーのドレスは、ビーズやコードなど様々な素材で装飾が施され、トレーンがついたデザインが多いことがわかった。そしてそれらは当時保守的と言われた人たちに受け入れられたことがわかった。文献調査のみでは 1920 年代のパリの女性たちが皆近代的な生活を享受し、それに適した衣服に置き換わったように捉えてしまうが、バルビエがファッション・プレートに描いたようにその過渡期には装飾的で色彩豊かなファッションも併存していたことがわかった。

Georges Barbier was a leading Art Deco illustrator.
Fashion of the 1920s, the Art Deco period, is described with the words innovation and

Journal of Kobe Shoin Women's University, No. 4（March 2023）, *89–98*.
神戸松蔭女子学院大学研究紀要 No. 4（2023 年 3 月）, *89–98*.

transformation. Corsets were removed, and straight silhouettes and non-ornamental designs were the hallmarks. They are called the garçonne look and are presented as the fashion of active and independent women. On the other hand, the fashions depicted in Georges Barbier's fashion plates are more decorative, and non-active elements such as trains are noticeable and appear prehistoric.

This paper discusses various aspects of Art Deco fashion, which was by no means one-dimensional, based on Barbier's fashion plates from the 1920s. It was found that the dresses of House of Wald and Jeanne Lanvin, which Barbier often drew for Gazette du Bon Ton, were often decorated with various materials such as beads and cords, and many of them had a train. The changes in fashion during the 1920s were not radical. As Barbier depicted in his fashion plates, decorative and colorful fashions were also accepted during this transitional period.

キーワード：ジョルジュ・バルビエ、アール・デコ・ファッション、ファッション・プレート
Key Words: Georges Barbier, art deco fashion, fashion plate

1. はじめに

ジョルジュ・バルビエ（1882-1932）はアール・デコ期に活躍したイラストレーターである。「*Gazette du Bon Ton*（ガゼット・デュ・ボ ン・トン）」誌、「*Journal des Dames et des Modes*（ジュルナル・デ・ダム・エ・デ・モード）」誌等のファッション誌で多くのファッション・プレートを描いている。

バルビエのファッション・プレートの作風は幻想的であり、衣服、背景を含め、装飾的な華やかさと豊かな色彩が特徴である。また、当時のファッションを描写するのみではなく、時代、地域を超えた空想的な作品も多い。

神戸松蔭女子学院大学では『*Le bonheur du jour : ou les grâces à la mode / texte et dessins par George Barbier*（今日の幸福、あるいは流行の雅 / バルビエによるポショワール・コレクション）』（1924）、「*Falbalas et fanfreluches : almanach des modes présentes passées et futures*（裾飾りと縁飾り : 流行の暦、現在・過去、未来）」誌のバルビエのファッション・プレートを所蔵している。これらのファッション・プレートはバルビエの特徴がよく表れている。色彩の豊かで、衣服、背景の装飾的な華やかであり、そして当時の情景を描いたものから、ロココ時代を描いたもの、異国の民族衣装を描いたものなど、設定は様々である。

バルビエが描くファッション・プレートからは、これまで日本の文献を中心に得たアール・デコ・ファッションのイメージとは違った印象を受ける。バルビエが活躍したアール・デコ期に当たる 1920 年代のファッションは、長く続いたウエストを強く締め付けるコルセットからの解放が進み、衣服は筒状のストレートなシルエットとなり、体のラインを強調しないストレートなシルエット、短髪のスタイルは第一次世界大戦を契機に進んだ女性の社会進出や当時発展を続けた自動車産業等によるライフスタイルの変化に結び付けられ語られる。また、ドレスの直線的な構成と過度に装飾的でないため、ファッションにおいてはこの時期を指してモダニズムと呼ぶことも多い。しかしこうした厳格さを表す言葉が用いられる一方で、バ

ルビエが描いたドレスの多くのように、装飾的なデザインのドレスも多くみられる。シンプルな上半身に対し、スカートの造形やヘムのデザインは多様であり、ガラスやプラスチックのビーズ、スパンコール、ラインストーンなど様々な素材を用いた刺繍やアップリケ等でドレスの表面は装飾されている。アール・デコ期を経てココ・シャネルが装飾を極力省いたシンプルなデザインに行き着く流れに対し、前時代的とも言える装飾性はフォーカスされることが少ない、アール・デコ期のファッションの一面であると考える。

本稿では、バルビエが描いた1920年代のファッション・プレートを基に、決して一面的ではなかったアール・デコファッションの諸相について考察する。文献調査のみでは1920年代のパリの女性たちが全て近代的な生活を享受し、それに適した衣服に置き換わったように捉えてしまうが、バルビエがファッション・プレートに描いたようにその過渡期には装飾的で色彩豊かなファッションも併存していたことを見ていく。

2. アール・デコ・ファッション

ここでは、アール・デコ・ファッションに当てはまる1920年台のファッションについて書かれた幾つかの言説を見ていく。

まず、多くの大学においてファッションの歴史に関する授業の教科書に指定されることが多い深井晃子らによる『増補新装カラー版 世界服飾史』（2010）では、「現代服へ」という見出しと共に、以下のように書かれている。

> *学問をし、職業を持ち、自由に恋愛する戦後の新しい女性は、1922年のヴィクトール・マルグリットの小説にちなんで「ギャルソンヌ（少年のような娘）」と呼ばれた。彼女らは活動的な生活様式に適合する機能的な服を求め、短い髪、目深にかぶったクロシェ、ゆったりとしたロー・ウエスト、膝丈のドレスというスタイルが流行した。この流行を先導したのは、パリ・オートクチュールとシャネルやヴィオネといったクチュリエ達であった。*[1)]

またそれ以外では、スポーツウェアが現代服への多くのヒントを与えた点、シャネルとヴィオネが当時主流であった機能的な服の先導者であったことが書かれている。

千村典生による『新訂増補 ファッションの歴史』（2004）は古代から2000年までの各時代を代表するファッションがまとめられているが、そこでは1920年から1925年までのスタイルを「ボーイッシュ・スタイル」、1926年から1929年までのスタイルを「ギャルソンヌ・スタイル」と定義している。「ボーイッシュ・スタイル」については以下のように書かれている。

> *20年台を通じての基本的なシルエットの特徴はウエストをゆるめた直線方のチューブラー tublar なもので、バストの膨らみを避け、腰も小さくまとめたボーイッシュなものでした。当時こうしたトップ・モードを着る勇敢な女性たちをフラッパー（おてんば娘）などと呼びました。*[2)]

当時の社会状況と絡めず、淡々と服装の特徴のみを書いているが、トップ・モードを着る勇敢な女性たちと書かれている。ここからトップ・モードを着る女性たち以外の存在を示唆しているが、そうした女性たちの服装は解説されていない。「ギャルソンヌ・スタイル」につい

ては以下のように書かれている。

> *堂々とショート・スカートで性を主張するトップ・モードの女性たちは、おそらく 1965 年以降のミニ・スカートの女性以上に、保守的な人たちから見れば驚異的な存在だったと考えられます。女らしくない女ということからギャルソンヌ garrçonne（男の子のような女の子）と呼ばれたものでした。*[3)]

ここではトップ・モードを着る女性と保守的な人という 2 つの立ち位置が示されているが、保守的な人が何を着ていたかについては書かれていない。

このように 1920 年代のファッション、またはアール・デコ・ファッションとして書かれているものは、直線的なシルエットで、近代的な生活に適合した機能性を持ち合わせたスタイルであり、ココ・シャネルやマドレーヌ・ヴィオネらが提案した衣服をイメージさせるものである。ただしこうした内容に留まるのは、古代から続くファッションの歴史を概観するためには仕方のないことである。

1920 年代のファッションを取り上げた研究として、Mary Lynn Stewart による『*Dressing Modern Frenchwomen Making Haute Couture, 1919-1939*』（2008）がある。Stewart はフェミニズムの視点から戦間期のクチュールにおけるマーケティングと「男性化」の度合いについて論じている。その資料となっているのは当時のファッション誌における言説である。この中で Stewart は装飾的であることは女性的であると見做されていたこと、直線的で装飾が少ない衣服が男性的と捉えられていたことを念頭に、「直線的で地味なラインを明るい色や柔らかい生地、装飾的なディテール、アクセサリーで「女性化」することによって、男性的とされるスタイルのインパクトをいかに弱めたか」[4)] を探り、「デザイナーは、刺繍やレースの襟、カフス、縁飾りといった「仕上げ」によって、モデルにおける男性的な要素を見えなくしていた。刺繍はステレオタイプ的に女性的な行為であったが、20 世紀にはすべて女性的とみなされた。」[5)] と述べている。また昼間は直線的なドレスを着用し、夕方からは曲線的なドレスを着用するよう勧めたコラムも紹介している。

Stewart の研究からは、前述の定型的な 1920 年代のイメージとは違う様相が窺える。1920 年代に入り、直線的で機能的、装飾的でない衣服へと置き換わっていく流行に対し、デザイナーやジャーナリストらの男性が装飾等の手法によって、少しでも前時代的な価値観の中に留めようとする様子が見て取れる。またそうした衣服を選択した女性も多くいたことが窺える。

以上のように、1920 年代のファッションというと、ココ・シャネルが提案したような直線的でショートスカート、無装飾、近代的な生活に適合した機能的な衣服に休息的に転換したようにイメージしがちであるが、同時代にはその流れを少しでも弱め、クラシックなオートクチュールな価値観の中に留めようとする、現在から見れば保守的なスタイルも併存していたことがわかる。また、ジョルジュ・バルビエがファッション・プレートに描いたのは、どちらかと言えば、保守的なスタイルであったと言える。

3. ジョルジュ・バルビエと 1920 年代のファッション

ここではジョルジュ・バルビエが描いた 1920 年代のファッションを見ていく。バルビエの

ファッション・プレートには、1920 年代に描かれたものでも、違う時代、パリとは違う地域を描いたものも多くあり、創作と実際の衣服を描いたものかを判別しにくい。そのため、今回は「*Gazette du Bon Ton*」誌のために描かれ、イラスト下部にメゾンの名前が入っているものを中心に見た。

3－1　ハウス・オブ・ウォルト

ジョルジュ・バルビエが描いた衣服の中で最も多く見つけられたのが、ハウス・オブ・ウォルトである。ハウス・オブ・ウォルトはシャルル・フレデリック・ウォルトが 1858 年に創業したメゾンである。ウォルトは現在ではオートクチュールの父と呼ばれる人物である。それは 1880 年代末から、年に 2 回のコレクションを発表するという、現在まで通ずるシステムを採用した点による。また、デザイナーとしてデザインを提案する立場をとることで、流行を発信する者としてのデザイナーの役割を確立した。ウォルトは 1895 年に死去しており、1920 年代は主にウォルトの孫にあたる、ジャン・シャルル・ウォルトが主にデザインを手がけていた。

バルビエが「*Gazette du Bon Ton*」誌に描いたハウス・オブ・ウォルトの作品の中からイヴニングドレス（ROBE DE SOIR）を描いたものを今回は 9 点確認した。この 9 点の中に 10 点のイヴニングドレスが描かれているが、そのうち 8 体が長くトレーン（引き裾）を引いている。トレーンは衣服の機能性を阻害する最もわかりやすい点であるが、バルビエによって描かれた長くたなびく裾はドレープ感を持ってドレスの優雅なイメージを高めている。

唯一トレーンを引いていなかったデザインが、「*Gazette du Bon Ton*」誌、1922 年の No.6 に収録された「*Espérez*（希望）」（図 1）という作品である。この作品は今回確認した中で、最も 1920 年代の近代的なスタイルに当てはまるものである。黒い直線的なシルエットに、当時流行のローウエストであるが、スカート丈は足首まで覆う長さである。また、スカート裾は若干ホッブルスカートのようにすぼまっているように見える。装飾的要素としては、肩口から腰にかけての赤いライン、腰には刺繍装飾、そして腰から裾にかけて房飾りが垂れている。また左脇部にはドレス本体と同素材でドレープが付けられている。このイヴニングドレスは、黒い直線的なシルエットとローウエスト

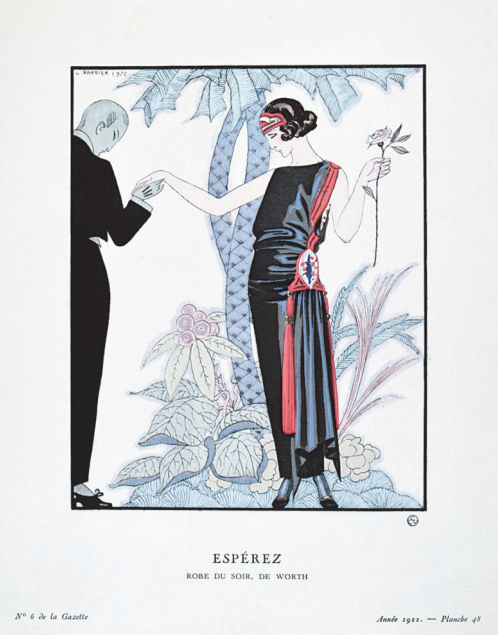

図 1：ジョルジュ・バルビエ《Espérez》
「*Gazette du Bon Ton No.6 1922*」

という 1920 年代における先進的なドレスの特徴を持ちながら、スカート丈、裾のすぼまり、黒という色の印象を和らげる肩から腰に裾にかけた装飾によって、保守的な傾向も窺える。また、バルビエが描いた女性は髪を短く切っているが、左手にはバラを持ち、右手は男性の手を取っており、フラッパーと呼べるような活発な印象ではなく、静的で、淑やかな印象を受ける。

3－2　ジャンヌ・ランヴァン

ジャンヌ・ランヴァンは 1889 年にメゾンを開始した。オートクチュールにおいて、母娘で着用できる衣服を手掛けたことで有名であり、1920 年代を通して活躍した。ジョルジュ・バルビエはジャンヌ・ランヴァンのイヴニングドレスを「*Gazette du Bon Ton*」誌のために描いているが、そこに描かれたうちのひとつを実物として神戸ファッション美術館が所蔵している。（図 2）そのドレスについては、以下のように説明がされている。

> *リボンをモチーフとし、パール、ラインストーンの装飾的な刺繍が施されたドレスは、アンダースカートの前身頃中央部にも刺繍がみられ、裾はトレーンを引いている。1920 年代はシンプルで活動的なスタイルが登場する中で、ランヴァンはエレガントで女性らしさを引き出すスタイルを発表し続け、保守的な人たちの心を捉えた。*
> *ファッション・プレートには、ランヴァンが娘のために服を作り始めたことを象徴するように、少女と大人の女性が描かれている。*[6)]

ここでもトレーンと刺繍と刺繍装飾がデザインの特徴とされている。そしてこうした要素が、保守的な人たちの心を捉える要因になっていたといえる。バルビエが描いたファッションプ・レート（図 3）は背景を淡い水色の衝立として描き、右側に立つ母と娘を淡いピンク、青で描き、図 2 のイヴニングドレスを着た叔母と、もうひとりの叔母のコートの黒色をアクセントカラーの役割のように配置している。全体的には淡いトーンで描かれており、柔らかで女性らしい印象を受ける。

図 2：ジャンヌ・ランヴァン
イヴニングドレス 1924

以上のように、バルビエが描いた 1920 年代のファッションは、トレーンを引き、装飾的であり、足の露出を抑えたスカート丈のものが多く、それらは主に保守的といえる人たちに需要があった。ハウス・

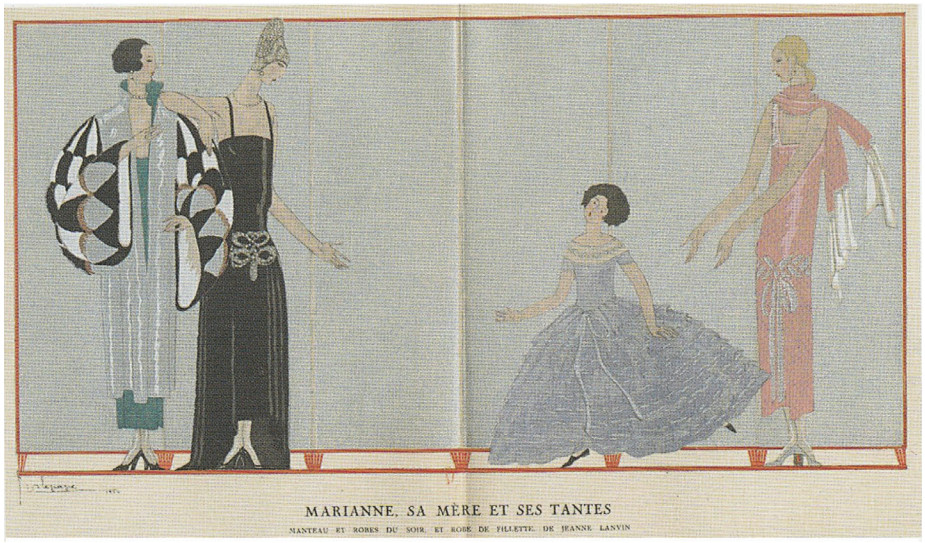

図 3：ジョルジュ・バルビエ《MARIANNE SA M È RE ET SES TANS》「*Gazette du Bon Ton*」1924-25

オブ・ウォルトもジャンヌ・ランヴァンも「Gazette du Bon Ton」に取り上げられていることからも、当時一流のメゾンであったことがわかるが、次の時代をつくるには至らなかった。しかしそうしたデザインもアール・デコ・ファッションの一側面であった。ココ・シャネルやマドレーヌ・ヴィオネが革新的なデザインを提案する一方で、ハウス・オブ・ウォルトやジャンヌ・ランヴァンのような保守的といえるデザインが混在した時代であった。そしてバルビエが多く描いたのは後者であった。

4. ジョルジュ・バルビエが描いたアール・デコ・ファッションの諸相

ジョルジュ・バルビエが 1920 年代のファッション・プレートに描いた、イヴニングドレスのデザインや女性像は、同時代を先導したとされるココ・シャネルやマドレーヌ・ヴィオネのデザインと比較すれば、前時代的な要素を残したものであったと言える。イヴニングドレスのデザインについては、トレーンやホッブルスカートのような運動性を損なう要素は 1900 年代まで続いた女性の労働性の否定とも取れる。また、リボン、様々な素材による刺繍、アップリケ、レースやチュールによる装飾は、ココ・シャネルのデザインのように機能性を求めていく中で男性的なデザインに近づく女性服を、それまで通りの女性服の範疇に留める行為とも考えられる。これらのドレスデザインからは、長年続いたパリファッションの伝統的なシック、エレガンスという価値観と、変わりゆく時代、生活の中で求められた衣服の近代化、新たな女性像が折衷されたアール・デコ・ファッションの諸相であると考えられる。

また、バルビエの作風は、こうした諸相を描くのに適していたと考えられる。豊かな色彩は色によって女性性を保とうとしたデザイナーの意図を汲みやすく、また背景や室内の調度

品まで精密に描くバルビエの特徴は、描かれる衣服にストーリーを持たせ、優雅で幻想的な雰囲気はドレスの装飾を引き立てる。

同じ「*Gazette du Bon Ton*」誌で先導的デザイナーと言われるマドレーヌ・ヴィオネのファッション・プレートを描いたのはイタリア未来派のエルネスト・タイヤートだった。タイヤートはヴィオネとの親交も深く、様々な面で協働をおこなうが、「*Gazette du Bon Ton*」誌のファッション・プレートではヴィオネの衣服を幾何学的な分割線を入れながら描き、当時先進的なヴィオネの衣服をファッション・プレートとして表現した。このことを考えると、「*Gazette du Bon Ton*」の中でも、そのメゾンを描くことに適したイラストレーターが選ばれていたことが考えられる。

1920 年代という時代はファッションが大きく変わっていく時代であった。ココ・シャネルがファッションに革命を起こしたといわれるように、その変化はそれまでの時代とは明らかに違った。結果、1920 年代、そしてアール・デコ・ファッションといえば、ほぼシャネルが提案した機能的で、直線的で、そして装飾を極力排した簡素なデザインがイメージとして定着することになった。特にファッションの歴史を語る上では、ジャン・シャルル・ウォルトといった当時活躍したデザイナーに光が当たることは稀になった。

バルビエのファッション・プレートは、そうした時代の変化の中で、新たなファッションを模索しながらも、伝統的な価値観を保とうとした、アール・デコ・ファッションの諸相を描いた貴重な資料であるといえる。

4. おわりに

本稿は、バルビエのファッション・プレートを見た印象と、ファッションを概観して語られる場合の 1920 年代のアール・デコ・ファッションの認識とのずれを出発点として、調査を開始した。

調査した内容からは、直線的で無装飾、そして黒が多く用いられはじめた女性服に対し、男性的な要素を強めることでそれまでのパリオートクチュールが築いてきたシックやエレガンスといった価値観の揺らぎがあったことが分かった。バルビエの描く衣服には、当時の流行の直線的なシルエットであっても、装飾的であり、多くの色が使われていたのは、伝統的な価値観と新たな表現の間で生まれたデザインとして捉えることができるとわかった。

生地の量感を持って描かれるトレーンや、細かく描かれた装飾が背景や舞台設定によって詩情豊かに表現されたバルビエのファッション・プレートは、現在語られる歴史のように一筋縄にはいかなかった 1920 年代のファッションの変革の様子がみてとれるアール・デコ・ファッションの諸相を描いたものであった。

引用文献

1） 深井晃子監修『増補新装〔カラー版〕世界服飾史』株式会社美術出版、2010、pp.142-144
2） 千村典生著『新訂増補　ファッションの歴史』平凡社、2004、p.53

3）同上書、p.55

4）Stewart, Mary Lynn. *Dressing Modern Frenchwomen: Marketing Haute Couture, 1919–1939*. Johns Hopkins University Press. 2008. Chapter 9.（著者訳）

5）同上

6）神戸ファッション美術館編「DRESS COLLECTION」展カタログ、神戸ファッション美術館、2016、p.51

図版出典

図 1："*george barbier - esperez - july 1922Tumblr*" by Mann Library is marked with Public Domain Mark 1.0.
https://www.flickr.com/photos/52061573@N03/26620444053（最終アクセス日：2022 年 12 月 10 日）

図 2：神戸ファッション美術館編「DRESS COLLECTION」展カタログ、神戸ファッション美術館、2016、p.51

図 3：神戸ファッション美術館編「DRESS COLLECTION」展カタログ、神戸ファッション美術館、2016、p.50

参考文献

荒俣宏著『ファッション画の歴史』平凡社、1996

千村典生著『新訂増補　ファッションの歴史』平凡社、2004

深井晃子監修『増補新装〔カラー版〕世界服飾史』株式会社美術出版、2010

神戸ファッション美術館編「DRESS COLLECTION」展カタログ、神戸ファッション美術館、2016

Martrelli, Barbara. *George Barbier: The Birth of Art Deco*. Marsilio. 2009.

Proppe, Rebecca. *Selling the Art Deco Lifestyle: The Distinction of the Modern Woman in 1920s Fashion Illustration*. https://www.academia.edu/18351616/.（最終アクセス日：2022 年 12 月 9 日）

Smith, Arthur. *Chevalier du bracelet: George Barbier and His Illustrated Works.* Thomas Fisher Rare Book Library, University of Toronto. 2013.

Stewart, Mary Lynn. *Dressing Modern Frenchwomen: Marketing Haute Couture, 1919–1939*. Johns Hopkins University Press. 2008.

Trubert-Tollu, Chantal. Tétart-Vittu, Françoise. Martin-Hattemberg, Jean-Marie. Olivieri, Fabrice. *The House of Worth: 1858-1954: The Birth of Haute Couture.* Thames & Hudson. 2017.

（受付日 : 2022. 12. 10）